



特集

子どもの「ことばの実践」を考える

緒言 川上 郁雄

近年、国内外の複数言語環境で成長する子どもたちが増加している。本特集は、そのような子どもたちの学びや成長、思いを捉える実践を、新たな視点から探究することを目指して組まれた。

では本特集の趣旨を改めて説明しておこう。複数言語環境で成長する子どもたちが、家庭、地域、学校、さらに国境を超えた様々な場所や場面で、ことばを介して、あるいはことばと共に、他者とコミュニケーションをとりながら行っている多様な営みを、本特集では「ことばの実践」と捉える。なぜそのような営みを「ことばの実践」と考えるかと言えば、これまでの「日本語習得」の枠を超えて、子どもの姿やことばの実態を捉え直すことが必要ではないかと考えたからである。そのねらいは、教室活動の中にも、また教室外の遊びや家庭の日常的なやりとりの中にもありうる、多様な営みを「ことばの実践」と捉え直すことで、教室内と教室外、学校と家庭、あるいは子ども(学習者)と実践者(教師)といった、これまでの捉え方から生まれる「二分法」や「境界」からの視点を超える広い視野から子どもの生を考えてみようということにある。さらに、そのような「ことばの実践」は複数言語環境の中で生きる子どもにとって、また家族やコミュニティや社会にとってどのような意味があるのかも考えたい。それがこの特集の趣旨である。

この特集には一般公募から投稿された論考を、編集委員会で厳正に審査し、ラインアップが組まれた。では以下に、それぞれの論考が提示している論点を簡潔に紹介しよう。

「研究論文」には3本の論考が掲載された。まず、太田裕子の論考は、幼少期より複数言語環境で成長した女性が親となり移動と複数言語環境の中で子育てをしてきたライフストーリーをもとに、親や祖父母の世代から受け継いだ「ことばの実践」、自身の「ことばの実践」、子どもの「ことばの実践」が英語、スペイン語、日本語によって多様に彩られていく軌跡を詳細に分析した。家庭や学校環境の中で複数言語使用をどう捉えるかによって「ことばの実践」が大きく変化することを示した点が注目される。

次の小林美希の論考は、親の都合により来日したJSL高校生への小論文を「書く」実践の中で見られた、生徒の「ことばの実態」の変化に焦点を当てた研究である。生徒は中国語を第一言語とするが未成熟な中国語を駆使しながら、第二言語である日本語で書く中で新たな「ことばの力」を獲得し「自己表現」とアイデンティティを探究していく。そのプロセスに実践者が動的なスキヤフォールディングをかけていく様子は「ことばの実践」の新たな側面を提示している。

太田真実の論考は、中国で生まれ幼少期に中国から来日し日本で教育を受けた女性へのライフストーリー・インタビューを提示する。太田自身も韓国で生まれ来日し日本で教育を受けた経験がある。同様の経験と記憶を持つ二人の対話的構築主義アプローチによるやりとりが分析され、二人にとっての継承語の「ことばの実践」とは何かが探究された。その中で、複数言語内における継承語の位置付けが成長過程で微妙に変化していく様子が明らかになった点は今後の継承日本語教育に新たな示唆を与えるであろう。

「研究ノート」には萌芽的研究として2本の論考が掲載された。劉碩の論考は、JSL生徒と指導員がともに中国出身で中国語を使用しながら日本語を学ぶオンライン実践を取り上げる。日本語学習の初期段階で媒介語を使う実践はこれまでもあったが、劉は、中国語を使うことに対する生徒の意識の変化やその生徒の意識の変化を観察する実践者の意識の変化、さらに両者の複数言語使用による「ことばの実践」において「場」が生成される点に注目し、その意味をメトロリンガリズムの視点から論じた。本論考は「ことばの実践」の動態性とリアリティを活写した意欲的な論考と言えよう。

中家晶瑛の論考は、中国人の両親のもと日本で生まれた息子の語りと、その息子を育てた父親の語りを交差させながら、日本、中国、米国への息子の移動と複数言語環境での日本語、中国語、英語の習得過程に見られる、親子それぞれの「ことば観」と、「ことばの実践」への意味付けおよびそれらと親子関係との関わりを詳細に論じた。親子のそれぞれの意味世界を捉える

ことで、国境を越える「移動する家族」におけることばの学びと実践の複合性、動態性、多面性を明らかにしようとする萌芽的研究として注目される。

以上のように、本特集には、「日本語習得」や「教師と学習者」という、これまでの議論や二分法を超えた動態的・相互作用적・主観的視点から「ことばの実践」のあり様を捉えようとした意欲的な論考が収録されている。これらの論考全体を見ると、それぞれの論考が実践内のやりとりや当事者の語り、ライフストーリーなどを丁寧に分析する質的研究法を駆使した研究になっているのは、「ことばの実践」を考える上で必然の結果だったのかもしれない。

本特集が、「移動する子ども」や「移動する家族」に関わる「ことばの実践」についての、さらなる研究の発展につながることを願う。

(編集委員会委員長)